
ありがとう。

萌百合雛乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとウ。

【Nコード】

N5074I

【作者名】

萌百合雛乃

【あらすじ】

どうも、くるみです。

この作品は、病気の女の子、柚子が主人公になっています。そんな女の子を何も知らずに支える男の子、敦士。

二人の曖昧な関係の行方と友達の優しさ、柚子の強さが見れる作品だと思います。

共感していただけたら嬉しいなと思います。

「また明日な」

そういつて君は、僕の心の中で笑ったあと、振り返り歩いていった。

私は、粉々になっても、崩れても、きつと君を思い出すでしょう。

そして君は大きな大きなちからとなるでしょう。

...

「柚子ちゃん、検査の時間ですよー」

「あ、はい」

このやりとりが何度、繰り返されたらろう。

そうして私は今日も、この狭苦しい病院で、病氣と闘っている。

歳は18歳、高校3年生。一応高校にはいつていた。

途中でやめたけどね。

学校では、嫌な思い出ばかりだった。

ろくにいけもしない学校。それでも憧れていた学校生活。

同情の目。上辺だけの付き合い。それでも、それでも。

普通がどれほど羨ましかったらう。

運動会も、体育祭も。当たり前前だが、当たり前ではない私は

みんなが嫌がることを一番にやりたがっている人間だった。

そして、恋だって。

年頃の女の子。端から見れば、なんてことのない普通の女の子。そんな私だって、恋をした。

高2の春。初めて告白されて、嬉しい気持ちを胸に、首を縦に振った。

3ヶ月続いて、ある日勇気を振り絞って病氣のことを打ち明けた。笑って髪を撫でてくれますように、と。

でもそんなのは、淡いものだった。

「まじでいってんの？重いって。無理無理。お前とは別れるわ。」

どうして私は。

病氣のこと。親のこと。私のこと。

たくさん怨んだ。

周りの人間を妬んだ。

どうして私なの。私はどうして病氣なの。

胸の中と外。二つの傷が疼いた。

それから、恋はしないって決めた。

私に恋はできないと。してはいけないんだと。

・
・
・

そのあとすぐに、体調が悪くなって学校をやめた。入退院の繰り返しが続き、息がつまりようだった。入院が長引くと決まったとき、私は昔からちよこちよここと使っていたPCを手に、家をでた。

病院は大嫌い。でも、そんな環境でさえ慣れている自分がいた。

同じ毎日を繰り返す日々。

検査。検査。痛い。気持ち悪い。点滴。薬。検査。検査。検査をしては、悪い結果がでて、内側から切り裂くような胸の痛みに襲われ、薬を飲んで吐き気と頭痛を起こし、栄養が取れず点滴。

こんなんで治るのか。

嫌なことばかりが頭を駆け巡った。

検査の合間にPCをつける。

楽しみはこれしかなかった。ほんの小さな暇潰し。

友達が増えていった。

いろんなサイトや、人とのつながり。

ネットには溢れるほどに人がいて、

寂しさを和らいでいた。

その中でも私は、どこかで知り合ったコンタクトの中で仲良しな人がいた。

名前は敦士。私はあつくんと呼んでいた。

なんとなくいつも話していて、

チャットを飛ばしたり、通話をしたり。

気づけばいつも一緒だった。

ある日その人と話していると、新しい人が

会話に入ってきた。

三人で話すのも、たまにはいいなんて、思っていた。

なんでそんなことしたのか、よく分からないんだけど

そのときのノリなのか、あつくんと私は幼馴染とかいう設定だった。

ネットではネット上の兄弟などをよく作る傾向がある。

そんな感じであたしたちも「そうそうw幼馴染なのよーw」

なんて、嘘ついたりして。

正直、嬉しかった。繋がりが深くなった気がしたから。

それから小さい嘘を重ねて、いつも一緒にいる幼馴染。

昔から傍にいた幼馴染。仲良しな幼馴染。

そんな風に作り上げられた偽りの私たちがいた。

偽りだと分かれば分かるほど、本当の幼馴染がよかったと

思う気持ちが増していった。

...

あつくんは、私より一つ年上。

普段は頼りないけど、心配してくれたり、褒めてくれたり。

肝心などでは前に出てくれたりなんかして。

なんだかんだでお兄ちゃん的な存在だった。

背中あわせだけど隣にいるよって、感じかな。

毎日が楽しくなっていた。
全てが頑張れる気がした。
私に笑顔を教えてくれた。

雨ばかり降っていた私の心が晴れていくようだった。
あつくんは太陽だった。

そんなあつくんにでも、秘密はあった。
それは病気のこと。

絶対に言わないって決めてた。
もう、離れてほしくないから。

...

「なあ、柚子？」

「お、どしたー？」

「お前よくafkするじゃん、なんで？」
afk＝退席

「いやww忙しいからさwwww」

「何やってんだよww」

「お菓子食べたりとか」

「あほかよww退席しないで食えw」

「はー？いやだしww」

「お前こないだ咳してたけど、大丈夫か？風邪か？」

「あっくんにうつされたのよ・・・」

「おまｗｗふざけんなw」

「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

ふざけて返すのが、精一杯だった。

検査や点滴、嘔吐の間は返せないから。

だけど嘘をついてる自分が嫌だった。

・・・

よくなっていると思っていたのに、結果はまるで違った。

命が危ないことを知らされた。

頭に過ぎるのは、家族でも友達でもなく、あっくんだった。

私は気づいていた。

あっくんの気持ち。あっくんへの気持ち。

でも認めたらいけないと思っていた。

認めたら、離れてしまう。

今の距離が一番いいんだ、一番。

だめなんだ。

だめなんだ。

好きなんて思ったら。

だめ。

どんどん痩せる一方だった。

歩くこともしんどくなってきた。

ご飯も食べられない。

自分がボロボロになるのが分かった。

死が近づいてきているのかと考えると

頭が痛かった。

死にたくない。生きていたい。元気になりたい。

そして、できれば。

一度でいいから、

たった一度でもいいから、

会いたい。

あつくん、会いたいよ。

・
・
・
・
・

・
・
・

私は唯一のリア友。莉奈にあっくんを紹介した。

莉奈もネットをやっているの、3人でチャットをしたりした。

莉奈はとってもかわいくて気が強い女の子。

だけど中身は繊細で、私をいつも心配してくれていた。

あたしは羨ましいと思っていた。

私は莉奈に、病気の話は言わないで。といって
今までのあっくんとの話をした。

「仲良しさんができてよかったじゃん！」と
いつてくれた。

同時に、

「んで、どうするの?」

つていわれて、私はドキつとした。

「えつ?何が?」

つていったけど、なんとなく分かってたから。

「その人のこと、好きなんでしょう?気持ち伝えなくていいの?」
苦しくなった。本当のことを言われて逃げられなかった。

「私は、もうすぐ死ぬんだ。だから今いつでも相手に悪いよ」

「馬鹿じゃないの柚子!死ぬなんてゆうなよ!」

「あつごめん。でも、考えるよ、そりゃあ・・・」

「でも・・・言わないでよ・・・寂しいからやめてよ・・・頑張ろうよ・・・」

「うん・・・頑張るよ、あたし・・・あっくんはきつとね。自分でいう
のも

なんだけど、あたしのこと好きって思ってくれてると思うの。」

「うんうん」

「それで、きつとあっくんは病気のことをいっても、変わらずに
一緒にいてくれると思うの。」

「うんうん、それじゃあなんで」

「だけど、だからこそ、辛い思いはさせたくないんだ。本当は会いたいよ」

好きだよ、大好き。だけどこれは秘密にしなきゃいけないんだ、したいんだ」

「そっか・うん、分かった」

「うん、黙っててね、お願い」

「・・・うん」

・・・

私は、ネットをしなくなっていた。

というよりも、もうあんまりやる力がなかった。

画面を見るのも辛くて、マウスも動かせない。

キーボードを打つのも大変だった。

この間、お母さんが扉の外で泣いているのが聞こえた。

ああ、もうだめなんだ。って思った。

死ぬ前にあつくんに出会えてよかったと思った。

あんなにいい人にめぐり合えてよかったと思った。

気づいたら私は震える手でキーボードを叩いていた。

10/16「きれいごとだよね、だけ。ど、だけどさ、あだし幸せだって

いえるんだ、やっと。やっとだよあつくん。

中学とか高校とか、そんなものより、も貴方とであったこと一番幸せだったっていえる、んだ。。。

もう何打ってるかもmわかんないやつ。、。

よく、見えなりの、画面が。、m

だけど伝えておきたい。っの。

ごめんね黙ってty

・・・だけど好きでした。

ずっとずっとおもって。けど、、

大好きでした。r

・

ど
れ
だ
け
泣
い
た
だ
ろ
う。

泣
い
て
泣
い
て
泣
き
叫
ん
で

疲
れ
て
耳
が
痛
く
て
の
ど
が
か
れ
て

頭
が
痛
く
て
泣
い
て
泣
い
て

そ
れ
で
も
貴
方
を
想
っ
て
好
き
で

ず
っ
と
考
え
て
い
た
く
て

眠
く
て
眠
く
て
周
り
が
白
と
黒
で

・
・
・

「そんなに言わないでっ恥ずかしいよ！」

「ごめんごめんっ・・・」

『今日はもう遅いし、面会時間終わりらしいからさ、また明日の朝くるわ』

「あ、うんっありがとう・・・」

『いいよ、気にすんな。明日いっぱい話そうな』

「じゃあね、柚子！あたしもバイトが終わったらくるね！」

「うん！二人ともまたね」

『ゆっくり休めよ柚子』

「分かったっ」

・・・

何が起こったのか、わからなかった。

あつくんがまさかきてくれるなんて思ってなかった。

莉奈の行動にはすぐくびっくりしたけど、本当に嬉しかった。

会えた・・・会うことはないだろうと思っていたはずの、会ったことのない

幼馴染という存在。

会えた。会えた。どう表現していいか分からないくらい嬉しい。

幸せな気分が胸いっぱい広がった。

綺麗に整った顔。少し茶色い髪。すらっとした背。

画面の中にいたあつくくんが目の前にいた。

まだ現実を受け入れられないほど驚いていた。

明日また会える。

次の私はちゃんと恋ができそうです。

今度は怖がらずに前を向いて

貴方を見てられるって思います。

なんちゃって。

眠い。きつと寝すぎて眠いんだな。

明日は朝からきてくれるだろうし、もう寝ちゃおう。

明日はちゃんと、お洒落しなくっちゃ。

そして笑顔であつくくんを迎えられるように。

...

おせすみ。

・
・
・。

10 / 16
・ AM : 02 : 21
・ 香椎柚子
| 死去
・

(後書き)

よんでいただき、ありがとうございます。

柚子の強さ、あつくんの優しさ、莉奈の思いやり
全てがこの結果をうんだのかなと思います。

ただ、お気づきでしょうか？

実は、本当はあつくんとは会えなかったんです。

本当は会いたいと強く願う柚子が自分自身でみた幻？のような感じ
です。

現実はそのなにもうまくいかないものです。

ただ、神様はそんな人間達へ、些細なプレゼントをしてくれるもの
です。

それが今回の場合、柚子にみせた幻だった、という感じですよ。

あ、それから私事ですが、この作品を読むときに

「SNOW」っていう人の「逆さまの蝶」という曲きいてみてくだ
さいww

私はこれを聞きながらこの作品書いたのもしかしたら
同じ気持ちに・・・なあってwww

あ、ちなみにですね

今作で10作品目を迎えます。本当に嬉しいです。

よんでくれている皆様、大好きです。

これからもよろしくお願いします。

琴崎くるみ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074i/>

ありがとう。

2010年10月10日01時04分発行